

母語と母国語の相克

— 在日朝鮮人の言語経験 —

ソ 徐 キョン 京 シク 植

(1) はじめに

在日朝鮮人2世として日本で生まれ育った私にとって、母語¹⁾は日本語である。朝鮮語は私の母国語であるが、母語ではない。その私にとって「非母語」²⁾である朝鮮語が「できる」というのは、どういう状態をいうのだろうか？

私は1951年に日本の京都市で生まれた。朝鮮人である私が日本で生まれた理由は、私の祖父が1928年に故国である朝鮮から日本に移ったからである。

1945年に日本は敗戦し、朝鮮は植民地支配から解放された。その時点で日本内地（ほぼ、現在の日本国の領域に相当する）に230万人ほどの朝鮮人が居住していたが、そのうち大半は解放された故国へ帰還した。しかし、さまざまなやむを得ない理由のため、およそ60万人の朝鮮人が戦後も引き続き日本に居住することになった。これが、現在の在日朝鮮人の起源である。

在日朝鮮人のうち朝鮮生まれの1世たちにとっては、その母語は朝鮮語である。私の祖父の日常生活用語は朝鮮語であり、どうしても必要な場合にのみ、たどたどしい日本語を使った。私の父は朝鮮生まれであるが6歳の時に渡日した。父は日本で初等学校に短期間だけ通ったが、そこではもちろん日本語でのみ教育を受けたのである。6歳の時から63歳で亡くなるまで引き続き日本で生活したため、父が朝鮮語を使う機会はきわめて限られたものでしかなかった。父の人生をトータルで見ると、朝鮮語と日本語の比重は逆転し、日本語がより重くなっていたと言わなければならない。私の家庭では、父の友人や親戚の1世が訪ねて来た場合を除き、日常生活で朝鮮語を使うことはなかった。父母が朝鮮語で会話するのは、子どもたちに知られたくない内容を話す時と決まっていた。

戦後の日本において、在日朝鮮人たちは朝鮮語で教育をおこなう民族学校を自主的に建設したが、日本政府はこれを圧迫して一時は廃校に追い込み、のちに再建された後も現在に至るまで正式な学校として認可していない。そのため、これら民族学校の卒業者は日本社会で多大な不利益を強いられている。また、こうした民族学校は北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を支持する民族団体³⁾が設立し運営していたため、さまざまな理由から北朝鮮と一線

母語と母国語の相克

を画したいと望む在日朝鮮人は自らの子弟をこれら民族学校に通わせなかった。他方、韓国（南朝鮮）政府は在日朝鮮人への民族教育に対する関心が希薄だったため、韓国系の民族学校は日本全体で数校しか存在しなかった。日本側と朝鮮人側双方からのこうした事情のため、在日朝鮮人の子弟のうち民族学校に通学するものの比率は多くても10パーセント程度にとどまっていたと考えられるが、近年ではその比率はさらに急激に低下している。

私自身も私の兄弟たちも、いずれも民族学校に通ったことはない。私は小学校から大学卒業まで、日本の一般的な教育機関に通った。小学校の一時期、「民族学級」と称する課外活動でごく初歩的な朝鮮語教育を受けたことがある。また、高校1年生の夏休みに民団⁴⁾と韓国政府が共催した短期教育プログラムで2週間程度の朝鮮語教育を受けた。これが、私が正式に受けた朝鮮語教育の全部である。⁵⁾

一方、私の兄2人、徐勝（ソ・スン）と徐俊植（ソ・ジュンシク）は、いずれも日本生まれで、その母語は日本語であったが、1960年代の後半に韓国へ留学した。徐勝はソウル大学社会学部大学院に、徐俊植はソウル大学法学部に入学したが、1971年春、2人は軍事政権当局によって「学園に浸透した北朝鮮のスパイ」という嫌疑をかけられて逮捕された。彼らは韓国の軍事政権時代が終わる80年代末まで獄中生活を強いられ、徐俊植は1988年に、徐勝は1990年に、ようやく出獄した。⁶⁾

兄たちが韓国で獄中生活を送っていた20年近い歳月の間、私はずっと日本で生活し、韓国に行き来することもなかった。したがって、朝鮮語を辞書を引ながら時間をかけて読める程度にはなったが、日常的に使う機会は皆無であった。兄たちが出獄して以降、さまざまな用件で短期間、韓国を訪れることはあったが、ある程度長期間にわたって生活してみたことはなかった。ようやく、昨年（2006年）春、勤務先の東京経済大学から「国外研究」のため韓国に派遣され、50代半ばを過ぎる年齢になって初めて韓国で生活してみる機会を得たのである。現在までに1年半ほどが経過したが、私はまだまだ母国語（朝鮮語）が「できる」という域にはほど遠い。

韓国での生活を始めるとき、私は以下の①から⑦のような朝鮮語習熟度の段階を想定してみた。もちろん、これはきわめて恣意的で主観的な基準であるが。

- ① 商店で簡単な買い物をしたり、タクシーやバスを利用して外出することができる。
- ② 映画やテレビドラマを視聴したり、新聞を辞書なしで読んで、その内容が80パーセント程度理解できる。
- ③ 友人や知人と政治的ないし文化的テーマで議論することができ、ほぼ誤解なく相手の論旨を聞き取り、自己の論旨を伝えることができる。
- ④ 原稿を読み上げる形式でなく、1時間ほどの講演ができる。
- ⑤ 警察や検察の尋問に対して落ち着いて正確に対応できる。法廷での審問に対応して、反

論や陳述を充分に行なうことができる。

⑥辞書なしで小説を読みこなすことができる。

⑦エッセーや小説を翻訳者を介さずに執筆することができる。

韓国生活を始める前の私は、①と②の間くらいに段階であった。現在の自分を自己採点すると、だいたい④あたりであろうか。

私は、以前から心の中で⑤を最低限の到達目標に定めていた。こんなことを考えたのも、軍政時代の韓国のイメージが、いまも私の深層心理にわだかまっているからだろう。秘密警察に逮捕されて尋問されているながら、朝鮮語が上手くできないために抗弁一つできないというカフカ的な悪夢に、私は若い頃から苦しめられてきた。しかし、先日、ちょっと体調を崩して入院した際、まるで警察の尋問のような看護師と医師の矢継ぎ早の質問にうまく答えることができず、まだまだ自分が⑤の段階に到達していないことを痛感した。

私は過去2年余りにわたり、韓国の新聞に隔週でコラムを連載している。⁷⁾ 日本にいた時は、きわめて漠然と、いつか翻訳者の手を借りず直接朝鮮語で書くことができるようになりたいと思っていたが、韓国に来てから、それがどれほど身の程知らずな望みであるかを思い知るようになった。レポートや論文なら今後の努力次第では不可能ではないと思うが、自分が日本語で書いているエッセーを、その内容だけでなく微妙なニュアンスまで含めて、朝鮮語で書くことができるようになるのは極度に困難だと思うようになった。

さて、上記の①～⑦の段階で、どの段階をクリアすれば、私は「母国語（朝鮮語）ができる」と言うことが可能になるのだろうか？

人によっては①の段階であるのに、「できる」と胸を張っている。別の人の場合には、ほとんど⑥の段階をクリアしているのに、細かい表現が一つ二つ分からないとか、発音や抑揚にかすかに不自然な点が残っている等の些細な理由で、自分は「できない」と悩んでいる。

外見などが明らかに「外国人」に見える人の場合は、①や②の段階でも、「外国人なのに、よくできる」と称賛される。他方、外見上も韓国人と同民族に見え、国籍も同じ韓国籍である在日朝鮮人の場合は、①や②の段階では、「自国民なのに、できない」という批判の対象にされる。時として、「在日僑胞なのに、よくできる」と褒められたり、慰められたりする場合もあるが、それは相手がこちらを「外国人」と見なしているからなのである。

日本でも韓国でも、一般の社会生活において、「母語」と「母国語」の概念上の区別はきわめて不明瞭であるが、その理由は、両国とも単一民族国家観に起因する国語ナショナリズムが根強いためだといえるであろう。

私の妻は日本人である。ある大学の付属韓国語学校に通って朝鮮語を習っている。彼女が語ってくれた、最初の授業の日の出来事は象徴的だ。彼女のクラスには数人ずつ、日本人、中国人、欧米人、そして在日朝鮮人がいた。授業の最中に先生が、それぞれの言語グループ

母語と母国語の相克

ごとに学生を集めようとして、こう呼びかけたそうだ。

「はい、日本人は手をあげて」その声を聞いて彼女を含む数人が手を挙げた。

「次に、中国人、手を挙げて」また、数人が手を挙げた。

「最後は英語グループ、手を挙げて」また、数人が手を挙げた。

先生の呼びかけはそれで終わってしまい。在日朝鮮人たちは、手を上げる機会を失ってしまったのだ。在日朝鮮人の若者たちはため息をついていたそうである。

この先生の頭の中では民族と言語が等式で結びついているようだ。日本語しかできない者は「日本人」に属するのだろう。しかし、彼ら在日朝鮮人の若者たちは、日本社会で生まれ育ちながらも、自分は「日本人」ではないと考えるからこそ日本国籍に帰化せず、はるばる祖国まで朝鮮語を学びに来たのである。その若者たちを「日本人」に分類することは、ひとつの暴力と呼べないだろうか？ ここにも、韓国社会でよく見かける無意識の国語ナショナリズムが顔をのぞかせている。

生まれながらに母語と母国語が一致している人々は、国語ナショナリズムが支配的な国家における言語マジョリティである。言語マジョリティは自分の言語に疑いを抱くことはない。彼の母語は、そのまま彼の属する国家の国語である。それこそが標準であり、彼の外に標準的言語があるのではないからだ。一方、在日朝鮮人は、彼にとって非母語である朝鮮語をどんなにうまく使えるようになっても究極の安心を得ることはできない。標準はいつでも彼の外にあるからである。

国語ナショナリズムの立場から見れば、誰かが自国民であるか外国人であるかを区別する境界線は、自国語ができるかできないかを区別する線上に引かれる。ある国語ができるかどうかは、ある国民の一員として認められるかどうかを決める試金石である。したがって、在日朝鮮人にとって、この問題は言語習得をめぐる技術的問題を超えた、自己のアイデンティティーを左右する重大事なのである。ここには、たんなる異言語間コミュニケーションの問題に解消することのできない、厄介な政治的問題が絡まっているようだ。この問題を、どう考えればよいのだろうか？

この問いに対して、現段階での回答を試みようというのが本稿の目的である。

もちろん、このことは私個人だけの関心事ではなく、また在日朝鮮人に限定される個別的な問題でもない。

(2) 「断絶の世紀」の言語経験

私はかつて、パウル・ツェラーン、ジャン・アメリー、ブリーモ・レーヴィという3人のユダヤ系知識人を対比しながら、20世紀という「断絶の世紀の言語経験」について論じたことがある。⁸⁾

ツェラーンは1920年、東欧ブコヴィーナ地方⁹⁾のチェルノヴィッツという多民族、多言語、多文化の地域に生まれた。この地域は第二次大戦の勃発とナチ・ドイツの侵攻によって破壊され、ツェラーンの両親は強制収容所で死亡、ツェラーン自身も1年半の強制労働を経験した。こうした歴史的経過によって、ツェラーンにとっての母語であるドイツ語は「敵のもの」になってしまった。

「自分の両親を殺した者たちの言葉で詩を書いているのか」と、戦後になってツェラーンは非難されている。それに対して、彼はこう答えた。「母語でこそ自分の真実を語るができるのだ。」¹⁰⁾ ウィーンを経てパリに移ったツェラーンは、ドイツ語で詩を書き続け、1970年、セーヌ川に身を投げて自殺した。

ジャン・アメリーは1912年ウィーンに生まれ、ウィーン大学で文学と哲学の学位を取得した。ナチス・ドイツによるオーストリア併合の際、妻とともにベルギーのアントワープに脱出。ベルギーで対独レジスタンス活動に参加したが逮捕され、アウシュヴィッツに送られた。ベルゲン＝ベルゼン収容所で解放を迎えたアメリーは、戦後もベルギーに住み続け、著述家となった。¹¹⁾

アメリーは、彼自身のようなドイツ系ユダヤ人は、アウシュヴィッツにおいて「よって立つとうとする基盤」としての「ドイツ文化」をことごとく敵^{ナチ}に乗っ取られたと述べている。この経験は、自己を形成した「文化」そのものからの追放といえるだろう。彼は1978年、ザルツブルグのホテルで自殺した。

プリーモ・レーヴィはイタリアのトリノに生まれた。第2次大戦末期、反ファシズム抵抗運動に参加したが逮捕され、アウシュヴィッツに送られた。ソ連軍によって解放され、トリノの生家に帰還した彼は、アウシュヴィッツでの経験を『これが人間か』と題する書物に書き上げた。¹²⁾

プリーモ・レーヴィは、収容所での命を削る強制労働の最中、ダンテの「神曲」を囚人仲間間に暗唱して聞かせるという行為を通じて自己のアイデンティティーを確認したという。そこにおいて、イタリア語が彼の「母語」であるということの意味したものはきわめて大きい。プリーモ・レーヴィは平和のための証言者として活動し、戦後イタリアにおける「文化的英雄」と見なされたが、1987年に自殺した。

19世紀から20世紀にかけてハプスブルグ、オスマン・トルコ、ロシア、中国（清）といった前近代の大帝国が崩壊した。新興の帝国主義列強による世界再分割戦争が続き、2度までも破局的な世界大戦が引き起こされた。諸国家の境界は大きく変動し、その度に、周縁の人々は国家に引っ張り込まれたり放り出されたりした。ここで境界というのはたんに地理上の国境だけを意味しない。近代国民国家が「母語」「母国語」「国民」を等式で結び付けようとする国語ナショナリズムと不可分のものであった以上、この周縁化された人々は諸言語の境界を右往左往させられることになったし、諸個人の内面にまで諸言語の亀裂を抱え込まざ

母語と母国語の相克

るをえなかった。ツェラーン、アメリー、レーヴィらユダヤ人たちの言語経験は、まさしくこうした事態を雄弁に物語っている。

いうまでもなく、こうした経験は彼らだけのものではない。日本が行なった植民地支配と戦争によってもまた、多くの人々が彼らに共通する経験を強いられた。朝鮮植民地支配にあたって日本は、教育勅語にのっとって朝鮮人を「忠良なる国民」に育成することを教育の目的に掲げ、その中心に国語教育すなわち日本語教育を据えた。朝鮮語を母語とする人口約2千万人（当時）の人々の国語が、一夜にして、外国語である日本語に変更されたのである。

さらに、1930年代後半になると、教育目標を「忠良なる皇国臣民」の育成とし、朝鮮語教育の全面的禁止、「皇国臣民の誓詞」の暗唱、宮城遙拝・神社参拝の励行、創氏改名などの「皇民化政策」を強行した。

当時の支配者日本の立場から見れば、自らの母語を守ろうとする朝鮮人の努力はすべて、国語としての日本語の優位性に疑いをいだくものであり、「八紘一字」の標語に表わされる大日本帝国の「普遍性」を損ねる「偏狭な民族的観念」と見なされた。朝鮮語の文法、綴字法を確立し、朝鮮語辞典を編纂することを目指していた朝鮮語学会は、「文化運動の仮面を被った独立運動」という嫌疑で弾圧され、研究者2名が拷問のため獄死、16名が治安維持法で起訴された。また、朝鮮語で叙情詩を書き続けていた詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）の場合は、日本の同志社大学に在学中、「独立運動」の嫌疑で検挙され、福岡刑務所で獄死した。

日本が朝鮮を支配していた期間中、日本語に翻訳され広く知られた朝鮮語詩集は1冊だけである。¹³⁾ 日本の著名な詩人である佐藤春夫はこの詩集によせた推薦文に、朝鮮の詩人たちが「まさに廃滅せんとする言葉をもって、その民の最後の歌を歌い上げたという特別な事情」が、こんなにも自分たちの心を動かすのだろうか云々と記している。この訳詩集が刊行された当時、朝鮮人の全人口はおよそ2500万人であり、当時の日本の全人口の四分の一を占めていた。その人々の母語である朝鮮語を、日本国家は廃滅させようとしていたのであり、大半の日本人はそれが歴史的必然であり、道徳的にも善であると信じていたのである。

日本の著名な文化人類学者である梅棹忠夫は、次のように回想している。彼が旧制高校生だった頃（1940年頃）、朝鮮北部への現地調査旅行を計画し、そのために朝鮮語を学ぶことを思い立った。しかし、その時点で、どんなに探しても日本人が学ぶための朝鮮語教科書も、辞典も、ただの1冊も存在しなかったという。それどころか、彼の学友は彼に「世界でいちばん汚い言語である朝鮮語」など学ばず、「世界でいちばん美しい言語であるドイツ語」を学ぼう真剣に忠告したのである。¹⁴⁾ このエピソードが物語るとおり、日本の朝鮮語圧殺政策は徹底したものであり、知識階層を含む大部分の日本人が、それを当然のこととして受け入れていた。

こうした日本による言語政策は植民地主義が被支配民族の言語に加える暴力の典型的な事

例であるといえよう。その暴力は、数世代以上にわたって、回復不可能なほどの傷を被害者に与え続ける。

現代音楽に多少なりとも興味のある人なら、尹伊桑（ユン・イサン）という名前を知っているだろう。彼は1917年、当時日本の植民地支配下にあった朝鮮で生まれている。独学で音楽理論や作曲法を学んだ彼は、1945年の解放（日本敗戦）と1950年からの朝鮮戦争の混乱を生き抜き、韓国において作曲家としての名声を確立したが、40歳にして、最新の現代音楽理論を学ぶためヨーロッパに渡った。そして、自らの内部に蓄積されていた、朝鮮人としての豊穡な音楽的母語と西洋の音楽的文法との出会いを通じて独自の境地を築いた。現代韓国では、日本経由で朝鮮にもたらされた西洋音楽の影響によって失われようとしていた朝鮮民族の音楽的アイデンティティを再発見した人物として彼は高く評価されている。

その尹伊桑が、晩年のある日、日本の作曲家・武満徹（たけみつ・とおる）との対談で「考えるときは何語ですか?」と問われた時、「わからない、昔は日本語で考えました」と答えている。¹⁵⁾ ちなみに尹伊桑の妻である李スジャ（수자）は解放後の韓国で国語（朝鮮語）教師だったが、植民地時代に学校生活を過ごしたため朝鮮語ができず、解放後になって慌てて朝鮮語を学んだと回想している。日本語はそれくらい深く、この世代の朝鮮人の内面にまで浸透していたのだ。

尹伊桑夫妻は私の父母と同世代にあたる。すなわち母語としての朝鮮語を保ちながら、植民地主義の暴力によって日本語を国語として押し付けられた世代である。この世代の朝鮮人は、意識するかどうかにかかわらず、二度と消えることのないその暴力の傷跡を抱えているのである。私自身は1951年生まれの在日朝鮮人2世であり、母語は日本語であるが、それがかつての支配者の言語であること、本来母語であったはずの朝鮮語を生まれながらに剝奪されていることを、常に意識させられている。

(3) 朝鮮語と日本語

ある程度、予想していたことではあるが、韓国で暮らし始めて1年半になるのに、まだに行く先々で「日本人ですか?」と尋ねられる。とくに商店やタクシーでは、かならずと言っていいくらいだ。愉快なことではない。私が使う朝鮮語の発音や抑揚が韓国の人々（native Koreans）にとって奇妙に聞こえるのだろう。それだけ、日本語を母語とする者にとって、朝鮮語の発音や抑揚を身につけることは難しい。

朝鮮語と日本語は文法構造が互いによく似ている。また朝鮮語と日本語は歴史的に長いかわりを持ち、中国の漢字語を起源とする共通の語彙も多い。この点で、朝鮮人と日本人にとって互いの言葉の文法を学び、読解することは、他の民族の言語に比べてかなり容易だといえよう。ただし、受動態表現など、重要な相違点もある。

一方、両語の音韻構造はかなり異なっており、互いにとって発音は難しい。そもそも、日本語には基本的に母音が5つしかないが、朝鮮語には21ある。また、日本語には朝鮮語の激音や濃音の発音はない。逆に、朝鮮語には日本語の濁音や長音はない。

日本植民地時代に教育を受けた高齢の朝鮮人で、自分は「日本語ができる」と考えている人は多い。事実、彼らには日本語を読むことは難しくないのだが、ひとたび口を開き、「冷蔵庫」とか「銀座」という言葉を口にすれば、ただちに日本人ではないことが発覚する。「れいぞうこ REIZOUKO」は「レイジョウコ REIJOUKO」と、「ぎんざ GINZA」は「ギンジャ GINJA」と発音されるからである。また、日本語の「つ」音も朝鮮語では「쓰」または「츠」と表記するほかになく、哲学 TETSUGAKU は「テチュガク TECHUGAKU」, 「突き出し TSUKIDASHI」は「スキダシ SSUKIDASHI」と発音されることが多い。

1929年9月に日本で起きた関東大震災の際、日本人一般住民による朝鮮人大量虐殺事件が引き起こされ、およそ6,000人も朝鮮人が犠牲になったが、この時、日本人自警団は通行人が日本人か朝鮮人かを見分けるため、「15円50銭」という言葉を発音させたと伝えられている。朝鮮語では語頭の音が濁ることはないので、朝鮮人にとって「じゅうごえんごじゅっせん」という日本語の発音は簡単ではないのである。まさしく、濁音の発音ができるかどうかで生死を分けたのである。

これとは逆に、日本人や在日朝鮮人にとっては、どんなに朝鮮語に熟達したとしても、朝鮮語の激音や濃音の発音は容易でない。また、日本語は基本的につねに語が母音で終わるため、パッチム(받침)と呼ばれる朝鮮語の子音終声の発音も難しいのである。

悪い比喩だが、もし将来、韓国で関東大震災のような虐殺事件が日本人を対象として起きたとすれば、私は朝鮮語の発音が下手であるために同民族から日本人と見なされて殺されることになりかねない。

さらに難しいのは敬語と呼称である。朝鮮語には丁寧表現の語尾や丁寧表現の助辞があって、聞き手に対する敬意を複雑かつ細かく表現する。敬意表現の基準は年齢の上下関係であり(絶対敬語)、日本語(相対敬語)のように身内と他人の区別はない。

これらの敬語や複雑な呼称を自然に使いこなすことは、日本人や在日朝鮮人にかぎらず、韓国社会の外から来たものにとってはきわめて難しい。それは言語そのものの難しさというより、その言語を使用して生活している人々の文化や生活習慣に習熟することの困難さということができる。

ある日、自宅にかかった電話を妻がとった。相手が「선생님 계십니까? (先生様はいらっしゃいますか?)」と尋ねたので、妻は「예, 있습니다 (はい, います)」と答えた。日本語だとこれが普通なのだが、韓国ではそうではない。「예, 계십니까 (はい, いらっしゃいます)」と答えなければならないのである。かりに彼女の朝鮮語発音が完璧であったとしても、電話の相手はこの応対を聞いて、彼女が日本人であろうと推測をつけるのである。

ある放送局のインタビューを受けて尹伊桑について語ったとき、インタビューを横で聞いていた若い知人が、後になってこんなことを言った。

「さっき、『尹伊桑先生』と言っておられました、あれはきちんとニム（님）をつけて尹伊桑先生様（선생님）と言ったほうがよかったですね。」

意外な指摘だった。「うーむ、日本語の感覚だと『先生』だけで、十分に尊敬の意味もつからね。しかし、それが失礼にあたるのなら、インタビューをやり直そうか？」

若い知人は慰めるように答えた。「いえいえ、先生様が日本から来られたことは、ほとんどの人が知っていることです、やり直す必要はありませんよ。」

この助言はあまり慰めにはならなかった。私の敬語の使い方は韓国の標準から見れば奇妙なものであり、韓国の人々は私が在日朝鮮人であることを見抜いて、たとえ失礼でも大目に見てくれているということだから。

後で気づいたことがある。例の若い友人は私と話をするとき、自分の指導教授のことを、ニムなしで、ただ「先生」と呼んでいるのだ。先日の指摘と矛盾するではないか。そのことを尋ねてみると、答えはさらに意外なものだった。

「それが正しい使い方なんです。なぜなら先生様のほうが私の指導教授より年齢が上ですからね。こういう場合、私が自分の指導教授の呼称にニムをつけてしゃべると、かえって先生様に対して失礼になるんですよ。」

難しいなあ…。思わず、ため息が漏れた。

しかし、社会がたえず変化しているように、敬語や呼称についても、当然ながら人々の見解は一様ではない。別の知人は、「ニムなんかつかないで、誰であれ全員に『氏』をつけて呼べばよいのだ。大韓民国は、まず呼称から民主化しなければ」と主張した。

私自身はこの考えに賛成だ。ただ、私が投げ込まれている構造は厄介である。いまのまま私に「呼称の民主化」論を唱えても、朝鮮語ができない「外国人」が外部から勝手な要求を並べているとしか受け取られないだろう。「呼称の民主化」を主張するためにも、私はまず、社会的位階構造を複雑に反映する朝鮮語の敬語使用法に習熟しなければならないのだ。そうしてこそ初めて、この国の言語共同体の一員と認められ、発言に耳を傾けてもらえるようになるだろう。いわば、後になって壊すために家を建てるようなものである。

朝鮮語は擬声語、擬態語のきわめて豊富な言語である。私自身にはこれについて語る実力がまだないが、在日朝鮮人詩人・金時鐘（キム・シジョン）の文章によると、たとえば、寝息の表現ひとつをとっても、乳飲み子は、「セクセク」といい、幼稚園に通っている腕白は「コウルコウル」、お父さん、お母さんは「クウルクウル」と表す、という。さらに、風の吹き方や強弱の加減によって「パルランパルラン」「ソロンソロン」「サンドウルサンドウル」「ソオルソオル」「ポトウルポトウル」と言った具合に実に多様な表現があるという。¹⁶⁾ このように豊かな朝鮮語の擬声語、擬態語が、日本語を母語とする者にとっては険しい壁となる

のである。

同じように、朝鮮語の一般会話に用いられる俗談や比喩もきわめて独特かつ豊穡である。たとえば日本語の「本末顛倒」に相当するのは「배보다 배꼽이 크다」(腹よりへそが大きい)である。「目クソ, 鼻クソを笑う」は「똥 묻은 개가 겨 묻은 개 나무란다」(クソまみれの犬が糠まみれの犬をなじる)となる。

「어물전 망신은 꼴뚜기가 시킨다」(魚屋の恥さらしはイイダコがさせる)というのは、「一人の恥ずかしい行為が皆の恥になる」という意味であろうが、きわめて独特であり、これに相当する日本語表現は思いつかない。「간에 기별도 안 간다」(肝に便りも届かない)というのも、日本語では「食事の量が少なくて食べた気がしない」という意味だろうが、こう言ってしまったらただの説明であって比喩の面白さはない。

同じ比喩が日本語と朝鮮語では異なる意味となる場合もあり、字面だけを見て判断すると失敗する。たとえば「八方美人」という比喩は日本語にも朝鮮語にもあるが、日本語では周囲にいい顔ばかりする不誠実な人という否定的な意味が強いのに対して、朝鮮語では多方面に能力を発揮することのできる人という肯定的な意味で使われるのである。

これらの俗談や比喩を自分のものにするためには、韓国の人々の日常的言語生活を下から支えている文化や習慣に長い時間をかけて馴染むことがどうしても必要である。俗談や比喩を自由自在に使いこなせてこそ、小説やエッセーを思うままに書くことができるだろう。そのレベルが、私の想定する「朝鮮語ができる」という段階である。日本で生まれ育ち、日本に生活の基盤がある在日朝鮮人にとっては気が遠くなるほどの険しい壁である。

そして、より根本的な問題は、在日朝鮮人にとって、この問題がたんなる「外国語習得」や「異文化コミュニケーション」の困難さという一般的な次元にとどまらない、政治的かつ倫理的な意味を帯びざるを得ないという点にある。

(4) 在日朝鮮人の母国語(朝鮮語)経験

先に述べたように、私は高校1年のときに「在日僑胞母国夏季学校」というプログラムに参加した。同世代の数十人の在日朝鮮人(韓国籍)とともに韓国を訪問し、大学の寄宿舎で寝泊りしながら、「国民道徳」と「国語」の教育を受けたのである。「国民道徳」というのは、簡単に言えば反共教育であり、大韓民国という国家や朴正熙政権の正統性を教え込むイデオロギー教育である。

道徳教育と国語教育、この二つは国家が人を「国民」へと造り上げるための必須のプロセスであり、すべての国家で「義務教育」の名のもとに行われていることである。ただし、朝鮮は冷戦構造の中で南北に分断されたため、この「国民化」のプロセスには激烈な暴力がともなった。数万人の住民が殺されたとされる1948年の済州島4・3事件¹⁷⁾や、1950年に起

こった朝鮮戦争中の多くの虐殺事件などが、こうした政治暴力を象徴する事件といえる。

朝鮮人は、植民地支配を受けた期間は大本日本帝国による「日本国民化」の暴力にさらされ、日本の支配から解放されたあとは分断国家の反共イデオロギーによる「大韓民国国民化」の暴力にさらされてきたといえる。

1945年の解放後も日本にとどまったおよそ60万人の在日朝鮮人たちは、日本からの「同化か、さもなければ追放」という圧力を受けてきたが、「大韓民国国民化」の圧力からは比較的距離があった。それは、日本と韓国との間に1965年まで国交がなく、在日朝鮮人の多くは「朝鮮籍」という事実上の無国籍状態におかれ、韓国との自由な往来すらままならなかったからである。この状況を韓国政府の立場からみれば、日本の領域内にまだ「国民化」されていない数十万人の朝鮮人が存在していたということになる。

1965年に日本と国交を結ぶ過程で韓国政府は、これら在日朝鮮人の「国民化」に乗り出す。具体的には、「国民登録」という手続きをとって韓国国籍を明確に取得した者にだけ旅券を発給し、親族訪問、墓参、留学、商用などでの韓国入国を認めるという手続きであった。さらに、それまで在日朝鮮人の日本における居住権はきわめて不安定な状態にあったが、上記の手続きを経て韓国国籍を取得したものにだけ、韓国と日本の2国間条約により「協定永住権」という比較的安定した居住権が与えられることになった。いいかえれば、なんらかの理由で「朝鮮籍」にとどまり韓国籍への登録を拒否した者、つまり韓国への「国民化」を受け入れない者には、故郷に往来する権利も、日本に安定的に居住する権利も与えられなかったのである。韓国政府のこうした政策は在日朝鮮人というエスニック集団に祖国の分断状況を強圧的に持ち込むものであったし、日本政府もまた自らの思惑によって、こうした分断政策に積極的に加担したのである。

高校1年生のとき私が参加した教育プログラムは、こうした韓国政府による在日朝鮮人の韓国国民化という政策の一環であったといえる。しかし、当然のことながら、わずか2、3週間の教育プログラムは、さほどの効果を挙げなかった。多くの学生は反共教育には退屈したし、国語教育にはついていけなかった。私自身、この速成国語教育にもかかわらず、簡単な挨拶ができる程度にしかならなかった。

ともあれ、このプログラムによって、私は生まれて初めて韓国の地を踏んだのだが、その時、同行した兄から、「大声で日本語をしゃべってはいけない。ウリマル（私たちの言葉＝朝鮮語）ができないことを恥ずかしく思え」と注意された。それは、在日朝鮮人2世である私にとって、厳しすぎるものといえるものだったが、正当な理由のある注意であった。

その理由とは、こうである。当時は日本による植民地支配の記憶もまだ生々しかった時なので、韓国の人々が日本に向ける視線はきびしかった。その中には、在日朝鮮人と日本人を同一視し、日本人への怒りを私たちにぶつけてくる人もいた。在日朝鮮人の一部にも遠慮なく日本語をしゃべり、祖国の文化や習慣を見下げるような態度をとる者がいた。そんな連中

母語と母国語の相克

が祖国の人々の神経を逆なでしていた。

在日朝鮮人も日本植民地支配の被害者なのであるから、日本人への怒りを在日朝鮮人が日本人に代わって受けとめなければならないことは不条理であるが、しかし、韓国の人々がそのような心情をもつことになった歴史的な背景をよく理解しなければならない。その理解を踏まえれば、韓国の人々の前で日本語を不遠慮にしゃべることは、ある種の不道徳であることがわかる。

さらに、日本植民地支配からの民族独立という課題が正当であったとすれば、植民地時代に強制された「国語」である日本語に代えて、朝鮮人大多数の母語である朝鮮語を独立国家の国語とすることも正当である。そうであるならば、朝鮮語を国語として使おうとする祖国の人々の努力に、在日朝鮮人も積極的に連帯すべきである。在日朝鮮人が朝鮮語を自らの国語とし、それを自由に使えるようになるという課題は、自分自身を植民地支配から解放するという課題でもある。つまり、在日朝鮮人にとって朝鮮語を習得することはたんに実用的な問題ではなく、脱植民地化を果たすというきわめて政治的な課題であり、同時に、そのための困難な闘いを続けている同胞たちの側に立つという、すぐれて倫理的な課題でもあったのである。

あれから40年もの歳月が経った。上記した当時の考え方を実現しようとする努力の前には、それを阻もうとする高い障壁が、少なくとも3つ、立ちはだかつてきた。

その第一のものは在日朝鮮人にとっては祖国である朝鮮の分断状態がいまだに継続しており、また日本と北朝鮮との間にはいまだに国交もない対立状態が続いているなど、政治的諸条件が在日朝鮮人と祖国の人々との広汎かつ自由な交流を阻んでいる点である。

第二には、すでに述べたとおり、個々人の努力や才能という次元をいったん別にすれば、日本語を母語として育った在日朝鮮人にとって朝鮮語（朝鮮文化）習得の壁がきわめて厚いことである。

もう一つは、時間の経過である。誰にも止めることのできない時間の経過によって、在日朝鮮人の世代交代が進み、今では私のような在日2世に代わって3世が中心を占める時代が近づいている。

だが、私は現在でも、当時の考え方に基本的な誤りはなかったと考えている。植民地支配という歴史に対する真の清算がなされず、現在も脱植民地化という課題が解決されていない以上、上記の倫理的課題もまた消え去ることはないからである。

先に名を挙げた金時鐘は1929年、朝鮮の元山生まれである。1948年の済州島4・3抗争に加わって闘い、右派からの追及を逃れて1949年に日本に脱出した。以後、現在まで日本に居住し、詩人として活動している。

金時鐘の回想のよると、彼の国民学校（小学校）時代は「国語常用」というスローガンの

下で、きびしい日本語教育が強制された。朝鮮人児童たちが通う彼の学校では、朝鮮語の使用は一切禁止された。毎朝、校長が運動場で遊んでいる子どもたちの間を巡回して、だしぬけに日本語で詰問し、すぐに答えられなかった生徒を、答えられるまで殴ったという。日本語には自信があった金時鐘だが、この校長のために鼓膜が破れ、鼻血が流れるほど殴られたことがある。しかし、この校長はいわゆる「悪い人」ではなく、むしろ、そうした教育によって朝鮮の子どもたちを天皇陛下の赤子にすることが朝鮮を良くすることでもあると心から信じている熱心な教育者だった、というのである。¹⁸⁾

このようにして日本語を内面化させられた金時鐘は、朝鮮に住む朝鮮人でありながら、朝鮮語の読み書きができなかった。彼の世代には、こういう例は珍しくない。

自分の内部にまで浸透した日本語との複雑な闘いについて、彼は次のように語っている。

私の戦後は自分の国の言葉である母国語の習得から始まりましたが、それこそ壁に爪をたてる思いで自分の国の言葉と文字を覚えました。それでも日本語の情感から自由ではありません。8月15日の解放によって、それまでの私の日本語はまるで光に触れた印画紙のように真っ黒に黒ずんでしまいました。それにもかかわらず、意識の目盛りとなって朝鮮語を推し量っているのは、まさにその日本語なのです。日本語は意識の機能として私に居坐った最初の言葉です。戦時中の植民地統治下で身につけた日本語が、日本人でない私の意識の関門となって物事を選別します。¹⁹⁾

このような意識をもちつつ日本で生活し、日本語で詩を書いてきた金時鐘は、「まさにその手慣れた日本語こそが、私には問題なのです」と語る。そして、七・五調に代表される日本語独特の短歌的抒情を意識的に拒否してきたというのである。「訥々(とつとつ)しい日本語にあくまで徹し、練達な日本語に狎れ合わない自分であること。それが私の抱える私の日本語への、私の報復です。』²⁰⁾

在日朝鮮人の代表的小説家・金石範(キム・ソクボム)は、金時鐘よりわずかに年長である。1925年に日本の大阪で生まれた金石範は日本の敗戦前夜に朝鮮を往来し、独立運動に加わろうと試みた。しかし、病気のため解放2ヶ月前に日本に戻り、解放を日本で迎えた。

彼の場合は、金時鐘とは異なり、母語としての朝鮮語を失っていなかったし、実際に一時期は朝鮮語で作品を執筆したこともある。しかし、民族団体から離脱して以後、とくに1970年以後は日本語で、済州島4・3抗争を主題とする大作小説『火山島』などを書いてきた。

日本の植民地支配に抵抗し、朝鮮民族の独立を支持する立場に明確に立ちつつも、日本という場で、日本語を読む読者を対象として、日本語で作品を書くという、矛盾に満ちた営為

母語と母国語の相克

を金石範は意識的に行ってきた。

私が、私にとっての日本語のメカニズムという場合は、在日朝鮮人の置かれている状況のなかでの日本語との関係を意味する。それは矛盾であり、緊張である。その緊張は日本語が私を束縛し、私は束縛を解放しようとするダイナミズムによって成り立つものだ。／私が日本語だけでもを書いている場合、私は日本語のメカニズムから自由でありうるのか。日本語の持っている民族的形式ともいべき音と形、それのもたらず意味、それによって喚起される日本的な感覚ともいべきもの、もろもろの日本語の機能に私は支配され、そこに私の『朝鮮人』は還元されて台なしになりはしないか。(中略) いったい、日本語に束縛されている自分を同じ日本語によって解放するというのはどういうことだろう。自分を飲み込んだ日本語の胃袋を食い破ってそこから出てくるのが果たしてできるだろうか。これは相克なのだ。²¹⁾

私は金石範の息子の世代にあたるが、彼がここに述べている問題意識をほとんど共有しているといえる。私自身、日本語で文章を書き、表現活動を行いながら、その行為そのものに内在する矛盾との緊張感から自由であったことはない。

かつて私は、『子どもの涙』²²⁾という作品で日本エッセイストクラブ賞という賞を与えられたことがある。この賞は「すぐれた日本語表現」に与えられるものだが、受賞の知らせを受けたとき、私の心は複雑であった。「日本語表現がすぐれている」ということは、それだけ私が骨の髄まで日本語に、そして、日本語によって支えられている日本の情緒に、浸透されているということの意味するからだ。この賞の受賞式でのあいさつで、私は、「旧植民地宗主国である日本で生まれた私は、本来なら母語であったはずの言葉（朝鮮語）をあらかじめ奪われ、かつての宗主国の言語を母語として育ちました。私はなにを考えようと日本語で考えているのであり、どう表現しようと日本語で表現しているのです。そうだとすれば、私は日本語という「言語の檻」の囚人でなくてなんでしょうか。その檻のなかで私は、何とかしてもっと広い場所に出て行きたい、かつて引き離された同胞たちに自分の心を伝えたいと身悶えてきたともいえるでしょう。」と述べた。

まさに「矛盾」であり「相克」である。ただ、私と金石範との違いは、彼は自分の中に母語としての「朝鮮語」を保っており、自分の中の「朝鮮人」が台なしになりはしないかという緊張を感じているのに対して、私は初めから母語としての「朝鮮語」を失っていることである。

高校1年生の夏、生まれて初めて韓国を旅した私は、その時うけた強烈な印象を詩に書き、1冊の詩集を自費で作成した。この詩集のあとがきに私は「これは私の最後の詩集になるだろう」と書いている。私には日本語で祖国を書くことの限界が見えるし、母国語（朝鮮語）

で書くには私はあまりに「日本人」すぎるのだ、と。つまり、少年期から青年期への移行期において、私は早くも「母国語としての朝鮮語」と「母語としての日本語」との分裂というアポリアに自分が直面していることに気づいていたのである。

日本語を母語として生きる在日朝鮮人は、自らの民族的アイデンティティーを形成する際においてすら、日本語によって行なうほかない。たとえば、日本植民地支配に抵抗し、その犠牲となった尹東柱の詩を読む際においてすら、多くの在日朝鮮人は日本語の翻訳で読むほがなく、その日本語訳にはすでに不可避的に日本人マジョリティの心理を反映する偏向が加えられているのだ。これもまた植民地主義の継続する暴力といえる。自らの祖父母や父母の世代の母語（朝鮮語）に加えられた植民地主義の暴力が、その子孫である在日朝鮮人に対しては母語（日本語）という暴力となり、何世代にもわたって加え続けられるのである。²³⁾

(5) 克服の道は？

在日朝鮮人における「母語と母国語と相克」というアポリアを克服する道はどこにあるのだろうか？

日本でも、韓国でも、しきりに語られるのは、時間の経過と世代交代が解決するという議論である。時間の経過とともに日本人への同化が進み、在日朝鮮人がすべて日本人になってしまうことで問題が消滅する、というわけである。

これこそが、日本政府が戦後一貫して追求している「解決」であるが、歴代の韓国政府も日本だけを非難する資格はない。

軍政時代までの歴代の韓国政府は、在日朝鮮人を暴力的に国民化しようとする一方で、棄民政策をとってきたといえる。朴正熙（パク・チョンヒ）の片腕である金鍾泌（キム・ジョンピル）は1965年の韓日条約を妥結に導いた影の主演であり、その後の与党総裁などを務めた大物政治家である。その金鍾泌は1980年に、日本の雑誌のインタビューで、在日朝鮮人2、3世は「もう、日本人になりきなさい」と述べている。同じインタビューで彼は、「いま、日本に大勢の在日韓国人がおりますね。この人々に対する長年の印象を、そのまま現在の韓国の上に重ねて、それで（日本人は韓国に対する）好き嫌いを決めてしまっているような気もするんですが……」とも述べている。²⁴⁾

在日朝鮮人に対する日本社会での偏見や蔑視に反論し抗議するどころか、逆に、そのイメージを韓国本国に重ねないでほしいと、この実力者は述べているのである。

もちろん、民主化以後の韓国政府がこの金鍾泌の見解をそのままに踏襲しているとは言わない。しかし、金鍾泌流の思考方式は現在もあちこちに見出すことができる。

国語ナショナリストの見地からすれば「母語」「母国語」「国民」の三項目が等式で結ばれていない状態は我慢ならず、在日朝鮮人の母語は日本語なのだから、その母語と母国語を一

母語と母国語の相克

致させるために、日本国民になれ、という論理になる。つまり、在日朝鮮人は国語ナショナリズムに屈服せよ、ということだ。

これは日本の国語ナショナリストに限った話ではない。自分たちと異なる母語の持ち主である在日朝鮮人が、それでも同じ民族の一員だと主張し続けることが、韓国の国語ナショナリストには理解しがたいようである。私自身、韓国に来て、韓国の人々から、それも善意で、「なぜ、帰化しないんですか？」と尋ねられて当惑することが珍しくない。この問いに対する私の答えは、「強烈な民族意識や愛国心などのためではない。継続する植民地主義に抵抗し、人間としての尊厳を守るためだ」というものである。

日本から見れば「同化」、韓国から見れば「棄民」という経過を通じた在日朝鮮人問題の自然消滅という「最終解決」構想は、しかし、現実によって裏切られている。60年代にも、80年代にも、「今後2、30年のうちに在日朝鮮人の大半は日本国籍に帰化し、在日朝鮮人はいなくなるだろう」という観測がしきりに語られた。しかし、もちろんかつてのままの姿や意識ではないが、現在も在日朝鮮人は消滅せず、日本政府の圧力にもかかわらず、少なくとも当分は消滅しそうもない。

また、たとえ今後、在日朝鮮人が一人残らず日本国籍に帰化し、法的な意味での「在日朝鮮人」が存在しなくなったとしても、それが「最終解決」にはなりえない。なぜなら、在日朝鮮人とは現にあった植民地支配という歴史の産物であり、その歴史をなかったことにすることは誰にもできないからだ。また、植民地支配の継続としての差別と偏見は、在日朝鮮人という「実体」によって造り出されているのではなく、むしろ、植民地支配の歴史を正しく直視し、自己省察して、克服することのできない日本人マジョリティが自らの心の中で造り出しているものである。いわば、在日朝鮮人という表象は、侵略と植民地支配という疚しい近代史から長く伸びて現在の日本人たちを覆う黒い影のようなものである。そうであるならば、最後の在日朝鮮人が消え去った後でも、日本社会にその亡霊は生き続けるだろうし、日本人マジョリティが自らの恐怖や嫌悪や憐憫の対象として、また、ときには身勝手にロマンチックな神話の登場人物として、「在日朝鮮人」を造りだすだろう。要するに、植民地支配が真の意味で終わらない以上、被支配者としての、また抵抗者としての「在日朝鮮人」が消滅することはありえないのである。

「母語と母国語と相克」というアポリアを克服する別の道はあるだろうか？

在日朝鮮人であることをやめて朝鮮人になりきる、という返答がありうるだろう。具体的には韓国または北朝鮮に永住帰国し、文化や生活習慣も日本的なものをまったく取り除いて生きるということだ。言語に即していうと、もともとの母語（日本語）を朝鮮語と取り替えるということである。母語を交換することによって、「母語」「母国語」「国民」の三者を一致させようとする試みといえよう。

母語の交換。ある年齢まで（おそらく4、5歳くらいまで）ならそれも不可能ではないだろうが、思春期を過ぎてから母語を交換するということは、生まれてからの人生そのものをすべて取り替えることと同義だ。そんなことができるだろうか？

とうてい不可能と思えるこの道に挑戦した人物は存在する。徐俊植というその人物は、私の兄である。1948年に日本で生まれ、日本語を母語として育った彼は、日本で高校を卒業してから韓国に留学した。1971年春、ソウル大学法学部の学生だった彼は、実兄の徐勝とともに政治犯として逮捕された。裁判では懲役7年（徐勝は無期懲役）を宣告され、1978年に刑期を満了したが、非転向を理由に拘束を継続された。彼は獄中で転向を強要する激しい拷問を受け、これに最後まで抵抗した。結局、彼が出獄したのは17年後の1988年である。

徐俊植の闘いは残酷な軍事政権との政治的闘争であったと同時に、在日朝鮮人としての自分を自己否定し、祖国の民衆に一体化しようとする熾烈な闘争でもあった。それは、先に述べた脱植民地化のための闘争に連帯することを通じて自己自身を解放するという在日朝鮮人の政治的かつ倫理的課題に対する、彼なりの実践でもあった。彼は朝鮮語を身に付けるため、つまり母語を交換するため、あれほど活字に渴く獄中生活にありながら、数年にわたって自分自身に日本語書籍の読書を禁じたこともある。

獄中15年目にあたる1985年、徐俊植はいとこ宛ての手紙に次のように書いている。

歯を食いしばって「真正の韓国人」になりたいと思い、私の骨髓深く食い込んだ「日本」をアルコールでも洗い落としたいと思っていた、そんな頑なで苦痛の時間が流れ去った時点で、私はいつの間にか、日本より酷薄で不潔で野卑だった私の祖国を夢中で愛しはじめていたし、日本人の友人たちほど「おとなしく、誠実で、素朴で…」要するに善良でありえなかった、痛みと悲しみと苦しみにまみれて生きていく同胞たちに、私が熱い愛情を感じていることに気付いていた。²⁵⁾

出獄する年である1988年には、彼は妹にこう書いた。

民族的主観というのは、ウリマル（わが言葉＝朝鮮語）の美しさに感嘆するようになり、ウリマルで人々と話ができるようになり、我が国の民謡の節も幾つかくらいは自然と口ずさみ、キムチの有難みも分かり、ウリマルで書かれた小説も愛読できるようになり、セマチ[早い3拍子]の拍子やクッコリ[巫女の儀式に鳴らす拍子]につれて自然と肩が揺れるようになり、ひいては我が国土との涙こぼれる「感応」までも感じるようになりながら、徐々におのずと確立されていくのだ。

留学生として祖国の土を踏んでから21年、うち17年を獄中に過ごした末に、彼は自分が「民族的主観」を確立したと感じていた。私の朝鮮語到達度段階表でいえば、最終段階の⑦をクリアした、と感じていたのである。

しかし、徐俊植の闘いはたやすいものではなかったし、直線的なものでもなかった。むしろ激しい動揺と苦悩の連続であった。たとえば1986年の妹宛ての手紙にはこう書いている。

いくら身も心も我が民族一色に染めようと足掻いても、いくら私の内側の「日本」を洗い落としたいと大声で叫んでも、結局のところ花園良北町（はなぞのこんぼくちょう）²⁶は、私が生涯逃れることのできない私の故郷であるようだ。故郷に対する胸に染みる恋しさ、その故郷を心置きなく愛そうとする自分にたいする恥ずかしさが複雑に去来するこんな切なさを、お前は分かってくれるだろうか……。

徐俊植が出獄してから、さらに20年近い歳月が流れた。彼は母語の交換に成功し、在日朝鮮人としての自己を完全に脱却して「真正な韓国人」になることができたのだろうか？ 最終的に、彼は自己が設定した闘争の勝利者となったのだろうか？ この問いへの答えは、私がすべきではないだろう。誰よりもまず、彼自身から聞かなければならない。

私に言えることは、彼の闘いは極端なまでに熾烈なものであり、他の多くの人に当てはめることの困難な事例であるということだ。しかし、そうだからといって、彼の闘いが無意味で無価値なものだったとは思わない。むしろ、それは在日朝鮮人が植民地支配からの自己解放を遂げるといふ課題についての、ある範型を示している。

彼が勝利したにせよ、あるいは出獄後さらなる挫折を味わったにせよ、その闘いは在日朝鮮人という存在が立たされている状況の困難さと、その困難に挑んで生きることの価値とを私たちに示している。一人の在日朝鮮人がこのように徹底的に苦悩し、闘い、少なくとも一般には不可能と見えるある地点に到達したという事実は、ひとつの範型であり、尺度である。一人がそれをなした以上、他の者にとってそれが不可能だとは言えないのだ。

しかし、かりに徐俊植がその闘いに最終的に勝利したのだとしても、それは、ここで考察してきた在日朝鮮人が直面するアポリアへの解答にはならないようだ。つまり、徐俊植が示した解答は、在日朝鮮人をやめる—そのこと自体、どれほど困難であろうか—ということであるから、ある個人にとっては一つの解答になりえても、在日朝鮮人という集団的自体が直面するアポリアへの解答にはなりえないのである。懸命な努力と闘争はすべきである。しかし、その闘争に勝利した者は在日朝鮮人ではなくなるのだから、在日朝鮮人の全員が母語を交換するという闘争に勝利しないかぎり、在日朝鮮人という存在は残り続けることになるからである。

(6) むすび——母語の権利と母国語の権利

私のもう一人の兄である徐勝が20年近い獄中生活を終えて日本に戻ってきたとき、空港に詰め掛けた記者たちは口々に日本語で質問をぶつけたが、兄はいっさい朝鮮語でしか答えなかった。記者の一人が「あなたは日本生まれで、20歳過ぎまで日本で育ったのに、なぜ日本語を使わないのか？」と質問すると、兄は即座に、「母国語の権利を主張するためだ」と答えた。

日本はかつて朝鮮民族の独立を否定し、独立国家の国語であった朝鮮語を禁止した。日本の地で生き続けることになった在日朝鮮人は解放後も民族教育の権利を抑圧され、大多数が朝鮮語を学ぶ機会もないまま生活している。これは、解放後も続く「母国語の権利」の否定であり、植民地主義の継続にほかならない。日本人記者たちに、兄が訴えようとしたのはそのことであった。

私はこの兄の主張を支持する。日本人記者たちは過去の自国による朝鮮植民地支配を認識しているのなら、朝鮮人の「母国語の権利」を尊重するべきであり、通訳を使ってでも朝鮮語でインタビューすべきだった。もしそれができないのなら、日本語で質問することについて恐縮の意を表し、兄の了解を得るべきであった。そういうことを想像もせず、当然のように日本語で質問し、兄が朝鮮語で答えたことを奇異に感じるということは、彼らの中に無意識な植民地主義的心理が生き続けているということだ。

2004年に韓国で『子どもの涙』という著書を出したとき、私は「TV、本を語る」というテレビ番組に出演することになった。スタジオで座談会形式である。当時の私は現在よりもはるかに朝鮮語の実力がなかった。そこで私は、質問は通訳なしで聞き、答えは同時通訳者に通訳してもらうという方法をとった。先に述べた倫理的基準に照らしてみれば、韓国のテレビ放送に出演して日本語でしゃべるということは、後ろめたくもあり、恥ずかしいことでもあった。事実、そういう批判も受けた。しかし、当時の私の実力からすれば、朝鮮語で言いたいことを充分かつ正確に表現できる自信はなかった。

また、内心では、不正確なたどたどしい発音でテレビに出演した時の、韓国の視聴者の反応も気になったのである。ある人々は「在日朝鮮人なのに下手だな。やはり彼らは外国人だ」と感じるだろうし、別の人々は「在日朝鮮人には頑張っているな」と同情するかもしれない。そのどちらの反応も、私の望むところではなかった。

私がこの放送で日本語を使った本当の理由は、韓国の視聴者に「母語の権利」という問題を考えてもらう機会にしたかったからだ。

植民地支配を受けた過程で民族の母語である朝鮮語を廃滅の瀬戸際にまで追い込まれた歴史から見れば、「母国語の権利」という主張には正当性があったし、いまも、ある。しかし、その一方で、同じ歴史の過程によって、いまでは朝鮮民族は異なる母語を有する複数の集団

母語と母国語の相克

によって構成されているのだ。在日朝鮮人は日本語を母語としている。中国朝鮮族も、世代が新しくなり、延辺の朝鮮族自治区以外の場所で育つ者の中には中国語（漢語）を母語として育つものが増えている。カザフスタン、ウズベキスタンなど旧ソ連の各地に暮らす高麗人たちのなかにはロシア語を母語とする者が多い。アメリカ合衆国に暮らす在米コリアンの大多数は英語を母語としており、この傾向は今後ますます強まるだろう。これらのコリアン・ディアスポラは、もはや朝鮮民族の一員ではないというのだろうか？

むしろ、発想を転換して、朝鮮民族の共同体そのものが近現代史の過程を経て、多言語・多文化共同体へと変容してきたととらえるべきではないだろうか。在日朝鮮人である私は、日本に対しては「母国語の権利」を主張しつつ、それと同時に、韓国または北朝鮮に対しては、異なる母語をもつ同じ共同体の一員であるという主張、すなわち「母語の権利」を主張する。このような両面的な主張こそが現実に適合した望ましい姿勢だと私は考える。「母国語の権利」と「母語の権利」は、本来的に、決して相互に排除する概念ではなく、両立可能なのである。

イギリス、フランスなど、一般に過去に多民族を支配した宗主国は、過去の被支配民族を含む多民族社会を形成している。自己の支配の代償を、好むと好まざるとにかかわらずそのような形で引き受けているとも言える。もちろん、これらの諸国において、現状でも不当な差別が存在していることは言うまでもないが、少なくとも、建て前はそうなっている。過去に帝国主義支配を行なった諸国の中で、日本だけは、第二次大戦後において単一民族国家意識による国家形成を行い、在日朝鮮人など旧植民地出身者を社会の平等な成員として遇してこなかった。

いわば帝国主義という外部からの暴力の結果、600万人の朝鮮人がディアスポラとなって離散し、朝鮮人の共同体は多言語・多文化の共同体へと変容させられたのである。すでに多言語・多文化になっているこの集団を、単一血統、単一言語、単一文化の集団へと押し戻すことは不可能であるし、また、そんなことを強行することは数多くの同胞を切り捨てる悲劇しか意味しないのである。

コリアン・ディアスポラの存在を視野に収めた、新たな多言語・多文化の共同体をつくるのが、私たちディアスポラと、本国の同胞たちとの、共同の目標になるべきではないか。それは帝国主義によって支配を受けた経験をもつ民族が、その経験に学び、反転させることによって、人類の歴史に何がしかの貢献をする道でもあろう。

このことは、コリアン・ディアスポラにとってのみ必要な要求ではない。

現在の韓国には移住外国人労働者をはじめとして数多くの定住外国人が生活している。また、国際結婚によって韓国に住むことになる外国人女性も多く、韓国人と外国人との間に生まれる子弟も増えている。こうした趨勢は誰にも阻むことができないだろう。

在日朝鮮人の子弟は日本人マジョリティからの差別的視線を内面化して、自分の父母が使

う朝鮮語なまりの日本語を恥じるが多かった。そのことは在日朝鮮人1世にいいようのない苦痛を与え、2世以下の世代にアイデンティティの混乱による苦悩を与え続けている。いま、いま外国から来て韓国に住む人々に、在日朝鮮人が味わったのと同じ苦痛を与えるべきではない。外国から来た人々に韓国の言語や習慣を教えることは、彼らが韓国社会で生きていくために実際的に必要なことである。しかし、それだけで満足しては、在日朝鮮人1世が味わった苦痛を彼らにも与える結果になろう。彼らの母語と出自の文化を、対等のものとして尊重しなければならないのである。

こうした社会を具体的に想像してみると、それは、朝鮮語はもちろんだが、日本語、中国語、ロシア語、英語、いずれはベトナム語も公用語として認定され流通しているような社会である。このような、もっとも開かれた社会において、そのそれぞれの成員を結び付けているのは植民地支配を受けた歴史の記憶と、そうした歴史を被害者としてはもちろん加害者としても、再現してはならないというモラルである。そこでは日本語なまりや中国語なまりの朝鮮語を少しも恥じる必要がないのだ。なぜなら、在日朝鮮人やその他のコリアン・ディアスポラもまた、同じ苦痛の歴史を生きて来た同胞と認識されているからである。また、ベトナム語なまりやウルドゥ語なまりの朝鮮語が、少しも蔑まれることはない。なぜなら、それらの地域から来た人々も、この開かれた社会を構成する平等な成員として認識されているからである。

そんなことをすれば「国語が汚される」とか「国語が破壊される」と主張する人々がいるに違いない。だが、少なくとも今後数世代の間は、その社会における言語マジョリティは依然として朝鮮語を話す集団である。したがって、この社会がその成員のすべてにとって住みよい社会であればあるほど、むしろ言語マイノリティたちが自発的にマジョリティの言語である朝鮮語を身につけようとするであろう。そこで、朝鮮語はさまざまな背景をもつ別の言語と接触し混交して変容していくだろうが、それを言語の発展過程ととらえることもできるはずだ。実際、現在の朝鮮語は中国語（漢字、漢文）、日本語、英語その他の影響なしにはありえなかったものであり、これら外来の諸要素を完全に除去した純粋朝鮮語というのは一つの幻想に過ぎないといえる。

ここに述べたようなイメージは、もちろん一つのユートピアである。このユートピア実現への障碍は、韓国の場合はまず、国民多数の間に無意識に根を張っている国語ナショナリズムであるといえよう。そして、このユートピア実現の最大の政治的障碍は朝鮮の南北分断状態である。こうした障碍の克服という課題を共有する多様な人々によって、分断を克服した朝鮮半島という場を中心に築かれる新たな多言語・多文化共同体—このようなユートピア像さえ思い描けないとすれば、せつかく植民地支配を受けた甲斐がないではないか。(了)

* 追記 (2008年6月9日記)

母語と母国語の相克

本稿は、韓国の季刊総合雑誌『黄海文化』（通巻 57 号、2007 年 12 月 1 日）に掲載された同名論文（権赫泰（クォン・ヒョクテ）翻訳）の日本語原稿に加筆したものである。もともと韓国の読者を対象にして執筆したものであるだけに、日本の読者にとっては馴染みのない用語や表現も少なくないものと思われる。今回、加筆するにあたり、こうした部分を大幅に修正することも考慮した。しかし、本稿が複数の言語圏にまたがる言語行為の困難さと可能性を問題にしているのである以上、かりに日本の言語マジョリティにある種の違和感を与えることになるとしても、その違和感を通じて主題に接近してもらうことこそが本稿の趣旨にかなっていると考え、あえて小幅な修正にとどめることにした。本稿では「在日朝鮮人」というマイノリティの立場から韓国の国語ナショナリズムへの批判を試みているが、この批判はいうまでもなく日本の国語ナショナリズムにも向けられている。

筆者は国外研究中に本稿の主題と密接に関連する次の 2 つの論文を執筆・発表した。

「母語という暴力」NPO 前夜刊『季刊・前夜』第 9 号、2006 年秋

「ソウルで『由熙』を読む」日本社会文学会刊『社会文学』通巻 26 号 2007 年 6 月 20 日

本稿とあわせて 3 部作ともいえる。ご参照いただければ幸いである。

*本稿は、筆者が東京経済大学国外研究員として 2006 年度および 2007 年度の二年間にわたり韓国で行なった調査研究の成果の一部である。

註

- 1) 「母語」(mother tongue) と「母国語」(national language) はまったく異なる概念である。「国語」とは国家が定め教育やメディアを通じて人民に注入する言語であり、それによって人民を「国民」へと造り上げる手段である。「母語」とは、「生まれてはじめて身につけ、無自覚のままに自分のなかにできあがってしまったことば」、「ひとたび身につけてしまえばそれから離れることのできない」「根源のことば」である。普通の場合、人はそれを母から受け取るので、「母語」と呼ばれてきた。[田中克彦『ことばと国家』岩波新書]
ただし、「母語」というのはジェンダー化された表現なので、実際には「親語」といった用語をあてるべきだが、今のところ一般的に用いられる適切な代案がない。
- 2) ここで「非母語」(non-mother tongue) という見慣れない用語を使った理由は、この場合、「外国語」(foreign language) という用語が不適切だからである。すべての人にとって「母語」と「母国語」が一致しているとは限らない。これと同じ理由で、すべての人にとって「外国語」は「母語」でないとは限らないからである。
- 3) 1945 年に結成された在日朝鮮人連盟（朝連）、およびその後身として 1955 年に結成された在日朝鮮人総聯合（総聯）。
- 4) 親韓国政府系の民族団体である在日韓民国居留民団の略称。現在は大韓国民団と改称。
- 5) 徐京植『子どもの涙』柏書房、1995. 서경식 [소년의 눈물] (한국) 돌베개, 2004.
- 6) 徐勝『獄中 19 年』岩波新書、1994. 서승 [옥중 19년] (한국) 역사비평사, 1999. 徐俊植『徐俊植 全獄中書簡』柏書房、1992. 서중식 [서중식 옥중서한] (한국) 야간비평, 2002.
- 7) 한겨레신문 [심야통신] 2005. 5.-2007. 4., [디아스포라의 눈] 2007. 5.-계속중
- 8) 徐京植「断絶の世紀の言語経験—レーヴィ、アメリー、そしてツェラーン」『ツェラーン研究』第 4 号 日本ツェラーン協会、2002 年 7 月

- 9) ブコヴィーナ地方は18世紀後半までトルコ帝国領、それ以後はハプスブルグ帝国領であったが、第一次大戦の結果、ルーマニア領となった。当時、この地方に居住した住民はウクライナ人、ルーマニア人、ユダヤ人、ドイツ人、ポーランド人、ハンガリー人その他である。第二次大戦後はソ連とルーマニアとに分割され、ソ連崩壊後はウクライナとルーマニアとに二分されている。
- 10) イスラエル・ハルフェン『パウル・ツェラーン—若き日の伝記』未来社
- 11) ジャン・アメリー『罪と罰の彼岸』、『自らに手くだし』いずれも法政大学出版社
- 12) プリーモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない—あるイタリア人生存者の考察』朝日新聞社, 프리모 레비 “이것이 인간인가” (한국) 돌베개
- 13) 訳者は金素雲。もともとは『訳詩集・乳色の雲』という書名で1940年に出版され、戦後『朝鮮詩集』という書名で再刊された。現在は岩波文庫に収められている。
- 14) 梅棹忠夫『実戦 世界言語紀行』岩波新書
- 15) 尹伊桑『わが祖国, わが音楽』影書房
- 16) 金時鐘「私の日本語, その成功と失敗」『わが生と死』岩波書店
- 17) 1945年の解放後、朝鮮半島は米ソの分割統治下に置かれた。アメリカは、あくまで統一国家としての独立を望む朝鮮人大多数の民意に反して、1948年に南朝鮮に分断国家を樹立するための単独選挙を行おうとした。朝鮮半島の南方海上にある済州島の住民たちは、この単独選挙に反対して1948年4月3日に蜂起したが、その後約2年間にわたる軍、警察、右翼団体の武力弾圧によって、最終的に3万人を超える住民が犠牲になった。在日朝鮮人の中には、この弾圧を逃れるため日本に密入国した済州島出身者も多い。この事件に代表されるような暴力的経過をとらなかつつ、1948年8月15日、李承晩を大統領とする大韓民国の樹立が宣言された。なお、韓国では民主化にとめない、2000年に「済州島4・3事件の真相糾明と犠牲者の名誉回復に関する特別法」が施行された。
- 18) 金時鐘「私の日本語, その成功と失敗」前掲書
- 19) 金時鐘「私の八月」前掲書
- 20) 金時鐘「私の日本語, その成功と失敗」前掲書
- 21) 金石範「在日朝鮮人文学」前掲書
- 22) 徐京植 前掲書
- 23) 徐京植「母語という暴力」『季刊・前夜』第9号, 2006年秋
- 24) 「諸君」1980年4月号
- 25) 徐俊植 前掲書以下、徐俊植の手紙の引用は同書。
- 26) 徐俊植が幼年時代を過ごした日本京都市の地名。